



競馬の美学に魅了された 馬主文士たちの物語



法蔵館
本体2,000円(税別)
ISBN978-4-8318-6265-5

競馬小説の先駆者 舟橋聖一

競馬と文学の意外な関係——競馬専門誌「週刊 Gallop」で連載されたエッセイをまとめた本書は、昭和の文壇を彩った「馬主文士」たちを中心に、日本文化を競馬と

『競馬にみる日本文化』

石川肇 著

profile 石川肇(いしかわ・はじめ) 1970年生まれ。総合研究大学院大学単位取得退学。博士(学術)。国際日本文化研究センター助教。東アジア近代における大衆文化・文学・ツーリズムを研究対象とし、「舟橋聖一の愛馬命名と女たち」でGallopエッセー大賞受賞。主な著書に「舟橋聖一の大東亜文学共栄圏」などがある。

研究センターで助教を務め、東アジア近代における大衆文化や文学、ツーリズムを研究。本書の第1章のメインとなるのが、著者が主な研究対象としている昭和の花形作家、舟橋聖一だ。

丹羽文雄や石川達三とともに「戦後の流行作家三羽ガラス」と呼ばれた舟橋は、東京馬主協合理事を務めるほどの競馬好き。馬主文士の草分けである菊池寛の勧めで戦前から競馬を始め、戦後には、妻の名前にちなんで名付けられたモモタロウを筆頭に、二〇頭近い愛馬を持った。

第二次世界大戦中に、初めての競馬小説「躍動」を執筆。各地の牧場と馬産地を一年にわたり見学して執筆された本作は、主人公である孝二の馬生産者としての成長と、愛馬ヤクドウが東京優駿(日本ダービー)に勝利するまでの長く険しい道のりを描いている。

そう、この小説はサラブレッドのみならず、それを育てる人間にスポットを当てた「馬産物語」なのだ。

いう側面から見つめ直そうという意欲作だ。

競馬は「ギャンブルの要素を強く持っている」一方、「そこにはある種の美学があったりする」とし、文学の力を最大限に生かし、その再評価を試みている。

著者の石川肇氏は国際日本文化

本作以前に競馬に関する小説がなかったわけではないが、それは競馬を物語の背景として用いるか、道具として取り込んでいるに過ぎなかった。そのため、競馬を主題として真正面にその世界を描き出した『躍動』により、舟橋は日本の競馬小説の先駆者と目されることになった。

一九四七年から書かれた「遠い花」は、日本人女性を主人公とした初の競馬小説。美貌の持ち主で家柄もよい主人公の満千子が、舟橋らしき馬主文士の門下生に、競馬によって浮沈する自身の半生を赤裸々に語るといふスタイルで話が展開していく。

四八年九月の国営競馬の開始は、連載中にリアルタイムで語られた。また、競馬の自粛規制が強要され始めた四〇年以降、夫と同伴以外の婦人客は入場禁止にすべきとの暴論が生じたというエピソードも。戦前は馬券を二枚買うと拘留されたが、戦後はたくさん買うように追い立てられるようになったという描写もある。

満千子の語りは戦前から始まるものなので、その期間の競馬にまつわる事柄や変化、そして女性たちが受けた差別までがよくわかる。これがこの小説のミソであり、満千子の物語に舟橋が込めた意味となる。

牧場を持った馬主文士が「スガタ牧場」に見た夢

柔道小説「姿三四郎」などで知られる富田常雄も、菊池寛の勧めで四九年に馬主になり、最初の持ち馬を「スガタ」と命名。その後有した「ツキノスガタ」という馬が、競馬にも使えない、子どもも産めない「迷馬」だったことから、馬の育成過程を知ることが馬主として重要だという考えに至る。そこで、北海道の日高に「スガタ牧場」を開設。馬主文士の中でも、牧場を持ったのは彼だけであろう。富田には「野火」を筆頭に競馬を描いた小説がいくつかあるが、著者は、スガタ牧場が創設された年に始まった新聞連載「風神雷神」



競馬を愛し、競馬に作品を重ねてきた作家たちの軌跡を辿る（写真はイメージ）

に着目。とある馬の馬主である映画監督が、その娘に言った（待つてろ。今にダービーを取るから）というセリフに、富田の馬主としての想いを重ねる。

富田の愛馬ミネノスガタは、ダイヤモンドステークスをレコード勝ちしているが、その後はチャンスを逃し続け、アラブのベンケイも走ったが、なかなか

思うように成績が伸びなかった。（中略）馬主のセリフは、富田自身の願いであり、スガタ牧場に見た夢だったのではなからうか。

子どもたちを思いやり 心の中に競馬場を持った男

流行歌「リンゴの唄」、童謡「ちいさい秋みつけた」などで知られる詩人で作詞家のサトウハチローも、馬主文士だった父・佐藤紅緑ゆずりの馬好き。競馬を題材にした詩や随筆も多く残している。しかし、紅緑が永眠して以降、競馬場へあまり行かなくなる。理

由は、「競馬場で父の知人と会うと、必ず思い出話になってつらいから」。加えて、金銭的な負担も挙げられていた。しかし、その後も臨場感溢れる競馬詩などを書き続けたサトウに対し、著者は「こんなにも馬や騎手の気持ちを理解する人が、本当にあの理由二つで競馬場通いを減らすものなのか」と疑問を抱き続けていた。

そこで、現在、岩手県北上市の「サトウハチロー記念館」で館長を務めるサトウの次男・四郎氏に、著者はかねてからの疑問をぶつける。すると、原因はサトウの文学的思想にあったことが明かされる。「父は、俺は耳に赤鉛筆を挿ん

でいた時代から競馬を知って、そんなギャンブルと童謡をつくるのは矛盾すると思うんだ。だから競馬場へ行かないことにした、と話してくれました」

つまり、子どもたちを思いやっていたの決断だったというのだ。そんなサトウの決断を、著者は「彼は幼いころからヤンチャだったが人々に愛された。それは根本に、こうした優しさがあったからなのだ」と評価。「心の中とノートに競馬場をこしらえ、馬とともに自身の生涯を駆け抜けた」とその人生に想いを馳せる。

他にも、吉屋信子、北杜夫、岡本太郎、寺山修司、水木しげる、遠藤周作、沢木耕太郎、赤塚不二夫など、昭和のスター著名人たちの競馬にまつわるエピソードがずらりと並ぶ。

また、後半の章では、大正から昭和にかけて活躍した鳥瞰図絵師・吉田初三郎のパノラマ絵図とともに、八戸、高崎、平壤、大連など「かつて存在した」競馬場を、そこにまつわる文学作品とともに紹介。知られざる歴史を学べるうえに、吉田の美しい鳥瞰図を眺めるだけでも楽しめる。

日本文化を競馬から切り取るという斬新さとその熱量に、競馬ファン、文学ファンならずとも圧倒されること間違いなし。

昭和の競馬文壇史から 日本文化を見つめる 競馬好きによる意欲作



著者からのメッセージ

石川 肇

奥深い、文化としての競馬

開国とともに西欧から導入された競馬は、昭和戦前期に大衆の娯楽の場として整備されました。一方、馬を持つことはステータスであり、競馬場は政治家や作家の社交の場でもありました。こうした競馬には「社会」が生じ、他のギャンブルとは違う独自の文化を育むことになりました。だから多くの文学者がそれに親しみ、書き残したのだと思います。ギャンブルだけでもスポーツだけでもない、文化としての競馬を本書でお楽しみください。